

藤木 充

元びわこ学園職員（事務長、やまびこ準備室長・地域事業部長）

現 しが夢翔会総括施設長

原稿を書けという。やまびこ支援センター設立の時のこと。カレンダー的ではなく、思い出を語るのがよいという。そのほかの思い出も書いてよいという。

それなら、と思う。

退職して、しが夢翔会（ステップ広場ガル）に10年。今なら、その前の28年の「びわこ学園」でのことを少しは、と思う。やまびこ支援センターの開設準備の時やそのもっと前の、あの時の岡崎先生や江口君のことを。あるいはおもいつくままに。

### ある日の夜勤で

今日も夜勤で、足浴〔週に2回の入浴なので、清潔の確保のためもあって、寝る前にバケツに入れたお湯で、足を暖めていた〕やおむつ交換、就寝の準備〔畳敷きの大部屋に15人くらいが寝ていた。畳の大部屋3室とベッドの部屋が2室。プレイルームにも何人か。あっちこっちにいる子供たちをそれぞれの部屋に運ぶ。そのしりから脱出する子供たち。〕などが終わって、遅出さんが退勤。夜勤相手の看護婦さんと少しほっとしていると岡崎園長がビール瓶を2本持って詰め所にこられた。「変わらない？勤務が終わったら飲み」もちろんお酒が大好きな私たちはありがたく頂きました。そのときの園長との少しだけの会話。

園長：「藤木君とかは何人くらい就職したかな。」

私：「第一（びわこ学園）もあわせると、40人以上です。」

「昭和50年。数年前に腰痛問題がピークを迎え、介護費が1.5対1から1.1対1へ引き上げられ、それこそ「どっと」直介職員が雇用された。江口君〔故人〕や菅野さん〔故人〕、高野さん〔奈良で相談員している？〕、廣澤君（やまびこ支援センター）、斉村君〔びわこ支援センター〕、坂口君〔法人事務局〕や南君〔きらら〕、宮本君〔滋賀県福祉事業団〕、下川君〔岡山救護施設浦安荘〕、まだまだ香川さん（第二びわこに勤務中）や奥西さん（下川氏夫人）や岡野君（どこにいるのやら）など々思い出すのですが書ききれずごめんなさい」などのかげで、不肖、私なども紛れ込んで就職。まさに多士済々。玉石混交となったのは磨きがない私とかがいたから」

園長：「これまでの森君、遠藤君や小林君、田中君〔下の名前をおっしゃらなかったが、たぶん敬三さん、もしかして立信さん〕は、一人ひとりの名前が出てくるけれど、君らは、顔はわかるけど名前はなかなか出てこないな。」

そうおっしゃると、当直室へ向かわれた。

重症心身障害者の入所事業という、まったく新しい事業が、それまでの混沌とした状況から徐々に整理されつつある、その代わりに創成期の熱気のようなものが（僕らは十分あるとと思っていたが）薄れつつあったのかもしれない。

40周年の記念誌にある「古市君と寝転がる岡崎先生の隣で漫画を読みふける福島さん」の写真。職員の無理やりな計画で始めた「水泳合宿」に、想像もできないほどにお忙しい中であつたはずなのに、ニコニコ参加してくださり、それこそ本当にステテコ姿で踊られた「学園音頭」ステテコしゃんしゃんの強烈な、暖かい印象が今も忘れられません。そういえば朽木の朝日キャンプで、カレーを煮ているかまどにまきをくべてくれる山崎ドクター（現理事長）も、相当に強烈で新鮮な印象がありましたね。

そんな岡崎先生の園長室の机の後ろに、書の額が揚げてありました。「熱願冷諦」。誰からか（小林さんだつたと思う）から、「先生は求められると好くこの言葉をかかれるんだよ」と聞きました。「熱願はわかるけど、何で冷諦、諦って「あきらめる」やん」と思っていました。それは、62年に先生がなくなられてからもそうでした。あるとき遠藤さんに、なんで「冷たくあきらめるなんです？」と聞いてみました。「ちゃうで、諦は諦

観、あきらめるという意味もあるけど、しっかり見極める、見つめるという意味で、冷諦で、しっかり見つめる、見極めるということや」と、教わりました。

今、私のいる席の前に「熱願冷諦」と打ち出した紙が貼り付けてあります。岡崎先生のように書にする力はありませんが、やっぱり一番大事な「言葉」としてそこにあります。

## 地域で仕事をするということ

そして昭和40年代以降の学園を覆いつくした「職員の腰痛」問題が、その必要性を誰よりも強く感じておられた岡崎先生ですら「短期入所や外来は、もう少し病棟が落ち着いてからにする」といわざるを得ない状況を作っていました。この、地域へ向けた仕事の空白は、当時のびわこ学園の「仕事」への他の重心施設からの厳しい評価を（全国研修で面罵されるという、理不尽さも含めて）生んでいたように思う。

この閉塞状況を打開する状況は、平成元年にやってきました。湖北の在宅重症児者の家族が湖北の県事務所の職員とともに「学校卒業後の活動場所を地域に作りたい。びわこ学園の協力がほしい（地域に重心の通所を考えると、その議論と運営の中心にびわこ学園がいるのは当然のことではないか）」という働きかけをするためびわこ学園に来られた。確か、夜であったように記憶している。これまでの入所か在宅か、ではなく、もう一つの選択——地域での生活を支える仕事までを学園の仕事とすること。この申し出を受け、翌年から県の単独事業として重度障害者の通園事業がモデル事業としてびわこ学園が実施する形で湖北通園が開始された。ほぼ同時期に国の通園モデル事業もほぼ同時に全国8か所で開始された。この動きに遅れることなく開所できたことが、以降のびわこ学園の仕事のターニングポイントとなったのだと思う。

湖北に引き続いて、一般事業化された県の重度障害者通園事業による彦根・近江八幡・第一びわここと大津の通所とくにのA型、B型事業による湖北（たいこ）、第二びわこ通園が事業を開始。これらの経験が、大津市の障害者支援センター創設への法人としての参加につながっていくことになっていきました。

大津のセンターは、「地域支援の拠点」として機能することとされると同時に医療機能の整備も行われ、具体的な形で、医療支援コーディネート（医療専門職支援を含めた地域相談支援調整機能）を目指すものとした。

支援センターの立ち上げ時には全体45人の職員構成を、重心からの異動者1/3、施設などの経験のある人1/3、新卒者や未経験の人1/3としました。新規事業の開始時としては、経験者の割合を相当に高い割合で出発できたのではないかと思います。それでも、みんなの経験は、入所「施設」の経験であり、いわゆる地域生活支援としてのデイサービス、ヘルプ、ナイトケアなどの「今」必要になったことに「今」答えるサービスについては、思いっきり素人の集団でもありました。それだから、だけでもないんだろうけれど、ずいぶん朝早くから遅くまで、あれこれおこる状況に対し、相談やサービスに奮闘する状況が続いたように思います。

と、ここで、センター立ち上げの（苦労したことなど）あれこれ書くのが正当なのでしょうが、（そういえば12月から2月の末まで、土日もほとんど休まず調整や搬入が続いていたことを今思い出したけど）開所後の利用者も含めみんな「困りあったこと。大変だったこと。けど楽しかったこと」が、大きすぎて記憶の中にはほとんど存在していません。

大津に生活支援センターを立ち上げて早々の頃（なので平成12年のたしか秋頃であったように思います。）大津市の事務所（生活支援センターの事務所とは別に大津市の管理のための事務所があります。公立の施設らしいといえば、全くその通り。）に、デイサービスの希望者がきてますよという連絡が支援センターの事務所がありました。

4歳位の多動の子とお母さんでした。その子のお父さんが突然亡くなり、支援センターの隣の葬祭センターで葬儀をすることになったけれど、集まった親戚が、多動の子のことを嫌いどこかへ連れて行けと言われていた。という訴えでした。憔悴した母親に、親戚と戦いなさいとはいえず、お預かりして、出棺の時間にあわせて、センターの車に乗せて、立ち会えるようにしました。自分たちの立ち上げた事業が、もしかしたら、障害を持つ人の切り捨てや阻害の道具になっているのではないかと、かんがえることがありました。

正月にデイ、ヘルプ（預かりの）をするかも、議論になりました。

私たちの、正月くらいは家族で過ごしてほしいという思いと、親戚がきて大変だからと言う利用者側の思い。

それでも、正月は、その日でなくても、家族で過ごせる時間があればよいのかなということになったと記憶しています。

私たちは、利用者の思いを代弁できない。けれど、推察することはできる。葬儀の家族席に座らせることはできないけれど、最後の別れの席に連れて行くことはできる。

障害を持つ子の親の一人として、あらためて家族の意味を考えています。

兄弟にほしいのは家族としての「心配り」。心のどこかに気にとめておいてほしいとおもう。そのために家族は、親は何をするのか、しっかり考えなければなりません。

## そして ここから

あの時、この時のことが、様々に脳裏に浮かびます。思いの中にある記憶は、時間経過順がぐちゃぐちゃで、間違った記憶も多々あるのだと思うけど、いまさら修正できないのです、ごめんなさい。

江口君。

20数年前の保育指導研の夜。

しこたまに酔うほどに、今を思い、これからを語りました。

びわこ学園が大好きなこと、何より新1棟の園生が大好きなこと、いっしょに働く職員とこれからがんばっていくのだということ。だけどね、と彼は言いました。

本当は九州に帰りたい、九州で重い障害のある人と暮らしたいんだと。

本当にほんとうに残念ながら、夢の途中で、彼の旅は終わってしまいました。

斉村くんや菅野さん、奥さん、そして40人を超える多くの同期の職員で、一緒に始めた「びわこ」での歴史。

斉村くんはずっと東棟で、江口くんはずっと新1棟、私はずっと西棟。就職以来、一度も同期会をすることもなく(31年目のいまもしたことありません)、それぞれがそれぞれの場所に根を下ろしていたのだと思います。

彼らが居るから、自分のやるべきこと、役割がわかる。そんな、関係であったと思います。

合議制の療育委員体制の変更についての討議や、体制検討委員会。組合の再建の時。そのほかのあの時この時。

その時々課題と方向を協議し、同じものを見つめながら、それぞれが違うもので補完しあう、そんな関係であったように思います。

そしてどんなときも、その真ん中に、揺るぎない江口君たちの姿が存在していました。

今、この時まで、第二びわこの療育実践の柱で、特に重い行動障害を併せ持つ知的障害の人たちへの実践の中心に江口君がいました。

菅野さん。

地域の、幾重にも疎外され、いうべきことも言えなくなっている障害を持っている本人とお母さんに心を配り、安心して相談できる中心に菅野さんがいました。やっと、本当に相談できる場所ができたという、お母さんの声にいっぱい触れました。

今、私がしていること、しなければならないことの多くは、ともにびわこ学園で青春した彼・彼女らの熱い思いを受け継ぎ、ゆるぎない実践とすることだと思っています。重度 重症の、自閉・行動障害の人たちの「生き難さ」を受け止めて「その人らしい」命を輝かせること。障害を持つ人に伴走し「その人らしい」生き方を支えられる相談支援(ソーシャルワーク)を実践すること。どれもが、彼らが実践し実現しようとしたものの精華として地域に広げなければなりません。様々にある地域の障壁を地突き抜けるようなあつい実践が、彼らの思いを引き継いだ私たちのできるただ一つのものだと思います。

岡崎先生が亡くなって30年。湯河原の全国指導員研修で「療育」について熱く語られていた岡崎先生のこと、ますます強い印象として思い出されます。それにしても、と思う。ご一緒に仕事ができて指導を受けた期間があまりに短い。12年。やっぱり遅れてきた世代なのだと悔やまれます。けれど、密かに「熱願冷諦」

の思いを継ぐ一人として、フォロアーとして、これからも、しっかり見極めることを心に仕事をする事、と  
考えています。

できているか、を、振り返るのは、もう少し後で。

(社会福祉法人しが夢翔会 総括施設長)